



## ◎本州との交流

昭和 53 (1978) 年、北区麻生町 7 丁目にある市営麻生球場の建設にあたり、発掘調査をした擦文時代の竪穴住居跡から出土した遺物群である。擦文時代とは、7~13 世紀に北海道を中心とする地域で営まれた文化をさす時代である。本遺跡の出土資料は、8~10 世紀頃の生活の様子や、本州との交流の状態を知るうえで貴重な資料であるとして指定された。

## ◎多くの擦文土器

発掘調査では、11 軒の竪穴住居跡が発見され、カマドの位置や大きさなどから 5 つのグループに分けることができた。そのうちカマドが北壁に造られた 2 軒の住居跡からは、多くの擦文土器とともに須恵器<sup>※1</sup>、土製紡錘車<sup>※2</sup>、土製支脚<sup>※3</sup>が出土し、土器 12 個 (うち須恵器 1 個)、土製紡錘車 2 個、土製支脚 3 個が指定された。

## ◎旧琴似川

現在の札幌の中心地は、豊平川によって形成された札幌扇状地に広がっている。扇状地の伏流水は道庁、植物園、知事公館で湧き水となり、北大構内や桑園駅から麻生球場の付近をとおり伏籠川に流れ込む川があった。

これらの川の多くは、市街地となり、北大構内の一部などに痕跡が残っているだけであり旧琴似川と呼ばれている。

## ◎1,000 軒くらいの竪穴住居

旧琴似川流域には明治時代中頃までにはまだ完全に埋まりきらない約 720 軒ほどの竪穴住居跡の窪みが麻生附近まで確認することができ、詳細な分布図が作成されている。現在の発掘調査の状況によれば、この分布図に示される地点以外でも竪穴住居跡が発見され、擦文時代の約 700 年間の間におおよそ 1,000 軒くらいの竪穴住居が作られたと考えられる。

当時の人々は、旧琴似川に遡上するサケ・マス漁、狩猟、採集と、扇状地の肥えた土壌を活用した原初的な農耕による生活を送っていた。

### ■遺物の時期

擦文時代 (約 1,300~800 年前)

### ■指定年月日

昭和 55 (1980) 年 8 月 12 日

### ■所在地

札幌市中央区南 22 条西 13 丁目 1-1

札幌市埋蔵文化財センター

### ■お問い合わせ

札幌市埋蔵文化財センター ☎512-5430

### ■観覧形態

常設展示はしていません

### ■観覧時間

8 時 45 分~17 時 15 分

### ■休館日

祝日、振替休日、年末年始 (12 月 29 日~1 月 3 日)

(ただし、5 月 3 日~5 日、11 月 3 日は閉館)

### ■観覧料

無料

### ■アクセス

市電「中央図書館前」

じょうてつバス「南 21 条西 11 丁目」



### 註 (用語解説)

※1 カマド：竪穴住居の壁に粘土や石を使用し造りつけられる煮炊き用の施設。煙を住居の外に排出する煙道がつけられる。

※2 須恵器：古墳時代に朝鮮半島から伝わった製作技術による土器で、縄文土器と異なり登窯<sup>のぼりがま</sup>を使用して焼く。窯の中の温度を高めた後に、空気の流入を少なくし、不完全燃焼をさせ<sup>かんげんえん</sup> (還元焰) 1,200 度くらいの高温で焼成するため青灰色となる。道内では、登窯跡が発見されていないため、本州から製品を移入したと考えられる。

※3 土製紡錘車<sup>せんいよ</sup>：繊維に撚りをかけるためのはずみ車。

※4 土製支脚<sup>しきやく</sup>：土器を使用し煮炊きをする時に、土器を支えるためカマドの中に置き使用する道具。